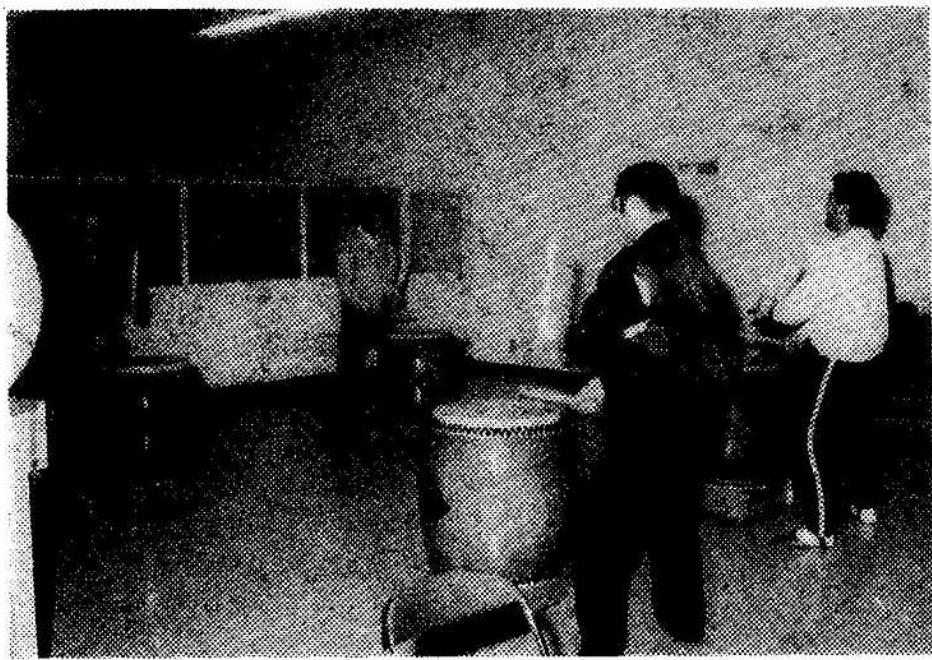


古墳
太鼓

創作に若い情熱

江釣子村五条丸の青年

披露めざし狂げいこ



江釣子村五条丸地区で、創作芸能「古墳太鼓」の完成を目指し、けいこが続けられている。「古墳の里を代表する芸能を」と二、三十代の青年たちが中心となり、太鼓を鳴らし続けている。初披露は秋の「古墳まつり」を予定。地区民が夢とロマンをほせた「オラが芸能」がいよいよ誕生する。

「芸能の里」と言われる通り、同村には数々の芸能が保存・継承されている。が、古墳地帯に位置する第六区（五条丸、本宿地区）には、代表芸能がない。

このため「地域独自の芸能を」という声が高まり、昨年、六区公民館（高橋直一館長）

創作芸能「古墳太鼓」の完成を目指し、けいこに励む江釣子村六区の青年たち

で芸能創作がスタートした。五条丸古墳があることから、古墳を土台にした芸能をと名付けた。その後、創作研究委員会を発足させ、学習会を開いたり、他の芸能を視察したりして昨年十月にけいこを開始した。

地域あげての芸能創作で、実際、芸能づくりの中心となっているのは二十人。このうち高橋義一さん（整骨師）ら二、三十代の若手五人が「主役」ともいうべき太鼓の鳴らし手。けいこ場所は六区公民館で、毎晩二時間ほど行われている。

花巻市の「北秀鬼太鼓」の保存会員の手ほどきを受けながらのけいこ。たいこを打ち鳴らす力の配分、リズムのとり方、型を覚えることが現在のけいこ内容。「ピアノでいえ

ばドレミを覚えている段階。基礎的ないこだが、若者たちは熱心だし、体力もあるからどんどん上達している」と高橋館長は評価している。その通り、若手たちも「オラが芸能」づくりに懸命だ。

計画によると、ことし二月までにオリジナルの基調曲を完成させる。「他の芸能を参考にするが、基調曲だけは、古

地区では「小・中学生など子供たちにも習得させよう」という話が進んでおり、古墳太鼓誕生に地区民の熱い視線が注がれている。

境内をイメージした独自のものにしたい」というのが、地区民の願い。振り付けや、披露する際の衣装も、「もちろん、古墳、古代をイメージ化したもの」と考えている。

九月二十三日の「古墳まつり」の芸能発表会が、古墳太鼓のお披露目。けいこ日数はたっぷりあるものの、より完成度の高い芸能に仕上げるため、けいこはこれから一段と厳しさを増す。

境内をイメージした独自のものにしたい」というのが、地区民の願い。振り付けや、披露する際の衣装も、「もちろん、古墳、古代をイメージ化したもの」と考えている。